

川崎

三式戦闘機 飛燕」

試作 1号機

童友社 1/100スケールプラスチックキット改造

製作・文 政府開発援助

1. 飛燕について

陸軍三式戦闘機「飛燕」の試作は昭和15年に発注されている。当時の単座戦闘機は軽快な運動性に重きを置いた「軽戦」と火力や速力を重視した「重戦」とに分けられていたが、川崎航空機の土井武夫試作部長はその区分にはこだわらず優れた戦闘機を開発することに心血を注いだ。その結果完成した機体（開発番号キ-61）は速度・上昇率・旋回性能全ての点において競作機（キ-60）を上回り、当時のドイツ軍主力戦闘機メッサーシュミットBf109をも凌ぐものであった。キ-61は直ちに制式採用され、「飛燕」の愛称が与えられた。「飛燕」は機体が頑丈で急降下性能に優れ多くの戦果をあげたが、戦争中期以降は整備上の問題から液冷エンジンであるハ-40（ドイツ製エンジンDB601の国産型）及び後継のハ-140のトラブルに多く見舞われることとなった。

2. キットについて

キットには1型の表記が有り、翼内機銃の砲身がモールドされていないところから1型乙を再現したものと思われます。かつてのマルサン製キットに有った主脚等の可動ギミックは失われていますが、表面の繊細な凹モールドは開発年代の古さを感じさせない仕上がりにです。童友社より塗装済キット「翼シリーズ」第二段として塗装の異なる二種類が安定供給されています（但しプライントボックス販売の為機種は選べない）。この塗装は大変細かく丁寧に塗り分けられています。また、「翼シリーズ」開始にあたりキャノピーが研磨されて凸モールドが無くなりピトー管も省略されていることから、未塗装状態のキットの発売は今後行われないうまいです。

3. 製作と塗装について

今回は試作1号機を製作しています。量産型とは胴体上方の明り取り窓の位置と形状が異なります。窓を四角くくり貫いた後に裏側から透明なゴム系ポントを塗り、表から瞬間接着剤を繰り返し垂らして面一に削りました。また、尾輪カバーをケント紙で自作しています。コクピット周辺はプラ板からそれらしい部品を切り出して追加しました。ラジエーターは素抜けなのでエバーグリーンのH型のプラ材で塞いでいます。キャノピーは明り取り窓を削り取り、フレームの位置が異なるので一部塗り分けをやり直しました。凸モールドの無い新しいキャノピーを使用することで簡単に変更できました。

本体の銀色には今回、ガンダムマーカのガンダムメッキシルバーを使用していますが、この銀色が剥げる禿げる（クリアーでコートしたのですがまるでダメ）。お陰でリタッチを重ね、大変見苦しくなりました。なお、塗り分け色は『丸メカニックNo.37 三式戦飛燕&五式戦』掲載の白黒写真から推定しています。ノーズコーンは元写真では先端とプロペラ付け根で塗り分けられているようにも見たのですが良い色が思い当たらず、今回は全て銀色としました。日の丸はマスキングテープをポンチで打ち抜いたものを用いて塗り分けました。前述の写真を見る限り、胴体には無かったようです。

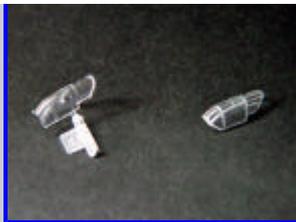
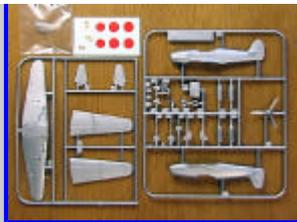


前方より



側方より

4. 製作過程



製作にはストックの旧キットを使用。キャノピーのみ新しいキットのものを用了。操縦席周辺にプラ板でパーツを追加。尾輪カバーをケント紙から新造。旧キットのキャノピー（左）との比較。明り取り窓を切り分けで再現している。除し枠の一部を描き直した。今回マーキングは全て塗り分けで再現している。